

# テストセットの類似度の操作による言語陰蔽効果の検討(2)

北神 慎司・佐藤 弥・吉川左紀子  
(京都大学大学院教育学研究科)

key words : verbal overshadowing effect , face recognition , verbalization

再認前に顔を言語化することが、顔の記憶に妨害的に働くことを言語陰蔽効果 (verbal overshadowing effect; e.g., Schooler & Engstler-Schooler, 1990) という。この効果に関する従来の研究 (レビューとして、北神, 2000) では、さまざまな実験変数を取り入れ、いくつかの理論的説明もなされている。しかしながら、学習、および、再認テストで用いられている刺激の統制が十分であるとは言えないだけでなく、テストセットの構成が再認成績に及ぼす影響について何ら検討されていない。

Kitagami, Sato, & Yoshikawa(2002)では、テストセットの類似度を操作して、言語陰蔽効果の追試可能性について検討している。彼らの研究の仮説は、テストセットの類似度が高い場合は、言語化によって形成される記憶表象(もしくは特徴的処理)が、テスト時のターゲットの弁別に有効ではないため、結果として、統制群よりも再認成績が低下し、言語陰蔽効果が生起するだろう、というものであった。実験の結果、仮説とは逆に、テストセットの類似度が相対的に低い場合は、言語陰蔽効果が確認されたが、類似度が高い場合は、再認テストが非常に難しくなるため、言語化の有無が再認成績に影響しないことが示された。

そこで、本研究では、床効果を防ぐために、ターゲットの記録時間を長くすることで、Kitagami et al.(2002)の仮説を検証することを第1の目的とする。また、第2の目的として、言語化される内容の質的な側面に着目し、言語陰蔽効果の生起因について検討するため、顔の特徴ではなく、顔から受ける印象(例えば、性格特性や職業など)を記述させる条件を新たに設け、再認成績のパターンを比較することとする。

## 【方法】

**デザインと被験者:** 被験者数は163名。デザインは、テストセットの類似度(高/低)×言語化(特徴/印象/統制)の2要因計画で、両要因とも被験者間。実験用冊子による集団実験。

**材料:** 学習刺激(ターゲット)とディストラクターは、8名の男性の顔と、それらの平均顔との合成変数を操作したもの。それぞれ、ターゲットは、「オリジナル40%、平均顔60%」、各ディストラクターについては、類似度・高条件は、「オリジナル20%、平均顔80%」、低条件は、「オリジナル60%、平均顔40%」であった。

**手続き:** まず、学習時には、すべての被験者に、顔写真を10秒間提示した。次に、挿入課題が5分間行われた後で、特徴言語化群の被験者は、5分間で学習刺激の顔の形態特徴についてできるだけ記述し、印象言語化群の被験者は、顔から受ける印象について記述し、統制群の被験者は、フィラー課題(都道府県名産出課題)を行った。最後に、学習時に提示された顔写真(ターゲット)と8枚の顔写真(ディストラクター)のなかから、学習時に見た顔写真を選択する、強制選択式の再認テストが行われた。なお、ターゲットの位置は、カウンターバランスが行われており、ターゲットに組み合わせられるディストラクター(類似度・高、低の2種類)は、被験者によって異なっていた。また、再認判断に加えて、9段階の確信度も併せて評定させた。

## 【結果】

再認テストにおける各条件の正再認率を図1に示す。 2

分布を利用した分散分析(逆正弦変換法)を行った結果、類似度および言語化の主効果が有意であり、類似度×言語化の交互作用は有意ではなかった。交互作用は有意ではなかったが、言語陰蔽効果の生起を確認するため、単純主効果検定を行ったところ、また、類似度・高条件において、言語化の単純主効果が有意であったが(多重比較: 統制 > 特徴、印象)、類似度・低条件において、言語化の単純主効果は有意ではなかった。

## 【考察】

まず、再認判断について、類似度・高条件において、統制(言語化なし)群よりも特徴言語化群の再認成績が低かったことから、言語陰蔽効果が追認された。しかしながら、類似度・低条件においては、統制群と特徴言語化群の成績に差は見られず、言語化による妨害効果は消失した。この結果は、Kitagami et al. (2002)の仮説、すなわち、テストセットの類似度が高い場合は、言語化によって生成された顔の特徴の記憶表象(もしくは、言語化による特徴的処理へのシフト)が、ターゲットとディストラクターの弁別には有効ではないため、言語陰蔽効果がみられるという説を支持するものである。

さらに、印象言語化群の成績パターンは、特徴言語化群の成績パターンとほぼ同様であったことから、言語化の質的な違いによって、言語陰蔽効果の生起が決定されるのではなく、言語記述を生成する、という操作自体がこの効果の生起因である可能性が示唆された。

## 【引用文献】

- 北神慎司 2000 言語陰蔽効果研究に関する展望 京都大学大学院教育学研究科紀要, 46, 209-221.
- Kitagami, S., Sato, W., & Yoshikawa, S. 2002 The influence of Resemblance between target and distractors in verbal overshadowing. Poster session presented at 3rd Tsukuba International Conference on Memory.
- Schooler, J.W. & Engstler-Schooler, T.Y. 1990 Verbal overshadowing of visual memories: Some things are better left unsaid. *Cognitive Psychology*, 22, 36-71.

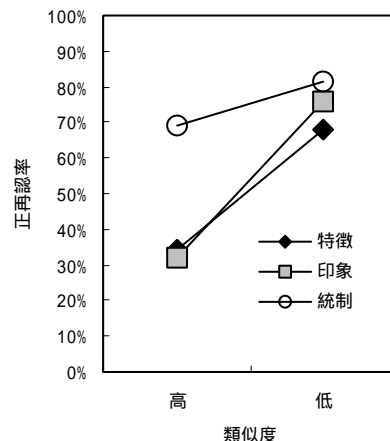


図1 各条件における正再認率

(KITAGAMI Shinji, SATO Wataru, YOSHIKAWA Sakiko)